

栗郷土研究会報

NO. 19

39. 6. 15

京都府栗郷土研究会
山崎町教育委員会内
栗郷土研究会
電話 750番

木の谷悲史に現われた 美玉・中島の最後

大 谷 信 也

亡父大谷薫雄生前特に生野義挙にまつわる美玉三平、中島太郎兵エ、殉節の経緯を究め、木の谷悲史なる小冊子を発行していたので、今回その一部を左に紹介します。

文久元年平野次郎尊王討幕の大義を遊説上御一人に帰一し、国民の総力を挙げて諸外国に対処、皇国本然の真姿に復古を説く。烈々の弁に同ずる者少からず。薩長土の勇藩を始め、足跡の印する処、藩論為に分れ、志士の来り交るもの多し。美玉も又此の頃より、平野と肝胆相照し私淑する所あり。平野又美玉の凡に非ず且つ殉国の熱誠火の如く、共に談じて大志を告ぐるに余す処なきを知る。当時藩論硬軟相争うの風あり。遂に脱藩満天下の志士の行に殉ぜんと、相携えて上洛。時に商家、時に雇傭、使丁に落魄。討幕の急先鋒としてその名重きをなす……中略……

烈々火の如き彼の論が志士の間にも重きをなすや、京都所

司代、新撰組の追捕漸く急なり。幾度か死地に身を没し、一時離京を喫むる同志少からざれども、死亡より念頭になし。何ぞ恐れんと、画策する所漸々多し。……

美玉の身辺益々危く、類の藩邸に及ぶを恐れ国臣始め同志の勸説を入れ、但馬の国湯嶋に至る。之より国臣の周旋余す所なく、桂の出石に潜伏せしと同じ。湯嶋は今の城の崎也。旅館田井屋に滞在す。館主鯉江伝右エ門旧くより国臣に私淑。庄屋武谷細助、町医里崎俊蔵等と共に美玉を中心として、時事を談じ師事す。此の頃露国の来航あり。一日北但の海浜に清遊。美玉の曰く。「此の地京都を去る僅に四十里露国と相對す。今四海颯雲急を告ぐるの時何等海防の見るべきものなし。凡そ皇国を守護するは、単に武家階級のみ務めに非ず。赤子の一人誰か皆之れ遠の楯ならざるべからず。速かに農兵組織を急設し、外夷の侵寇に對せんと」。

此の頃但馬各村を遍歴する虚無僧に本多素行なるものあり。字を良くし。静観と号す（近江国膳所の藩主の妾腹に生る。実粟に面識多き又井寒菴等と交友深く、後京都六角の獄に刺殺さる）美玉と同じく、農工商の青年に對し海防の為賑起を奨む。北垣晋太郎（後の男爵）中嶋太郎兵衛等之れに共鳴来り賛する者多く、遂に美玉等と合同大いに志気を鼓舞す。

（註）生野義挙は、文久三年（一八六三年）十月十一日挙

兵。十二日未明生野代官所を占領、午后十時沢宣嘉ら本陣を脱出、十四日午前三時（推定）美玉一行は播州に向う。

美玉三平、堀六郎、中嶋太郎兵衛、弟興一郎は共に山口村より神子畑に出で、黒原峠を越え宍粟郡に出づ。峠にかかる頃寺鐘の乱打せらるるを聞き、堀六郎に軍用金百二十両を持たせ先行せしめ、残る三名は後ること尅時同じ道を南下す。福知、福中を過ぎ生栖に出ずる頃は押寄せた農民益々多く、神戸境へかゝる頃凡そ五百人、空砲を打ち、打ち物取り大声に追うのみ。美玉度々立返り弁明せんとするも農民逃げて近寄らず。神戸村の民家を出で、離れんとする時岩野辺の庄屋石原菊左エ門駆付け「彼等は生野代官所へ押入った強盗だ。射止めた者には御褒美が出るぞ。実弾を打放せ」とおだてかけた。農民は急に勢い立ち弾薬こめ実弾を乱射するに及ぶ。

弁明せしも及ばず、一行今は此れまでと雙肌脱いだ美玉は緋縮緬の襦袢の下に鎖帷巾を着込み白縮緬の襷を掛け陣笠手に持ち、歩を早めけるに島田村田圃端にかくれし農民は大声にここに居るぞと言う。初めて劔を抜き追い掃い追いつき母栖口に至るや川向い清野の地よりの一発は陣笠の紐を切り鼻を剥ぎ取りぬ。為に顔面鮮血にまみれ大刀を右に左手にて鼻を押え進めども川向よりの乱射をさえきさるすべもなく、八ヶ所に弾を受け、中嶋又数創を受く。黒田大刀を収め「手向いするものならず」と大声に叫べど土民の悲しき情を酌むものなし。木ノ谷山神に至るや、大掠に身を支え

岩を小楯にあえぎけるが、大刀を杖によるめき出する所を先程から覗つていた福知村の五郎蔵がすかさず放つ一発に胸板を射貫れ打倒れぬ。「福知の五郎蔵打ち取つたり」と仰山に勝名乗を挙げぬ。時に四十二才。

此の声を聞くや中嶋太郎兵衛はせめて切腹をと弟黒田与一郎に助けられ側らの民家黒田力蔵方に連れ込む。家族は不在なりしに、其の中力蔵の妻すぎ女は氣丈にも浪人者吾が家に逃れ入りぬと聞くや、一人家に立返る。

重傷の太郎兵衛は懐中より二百七十両の路金を取り出し、与一郎に向い脱出せよと言うに、興一郎「死ねば共に」と聞かず。太郎兵衛きつと容を改め「此の度の義挙により三百年の幕府の礎を倒し得るとは初めより思はず。回天の業は此の後にあり。我茲に斃れて、吾が志を誰か継ぐべき。

天朝の御為一時縄目を受くるも恥に非ず。生き永られて兄の志を継げ」と、立上るや「早々首打て」と作法誤らず自刀。黒田は兄の言葉に死もならず、兄の後に困り落散る涙を払いぬぐうひまなく兄の首を打ち落さんとするも切先鴨居に切り込み思ふ様にならず。遂に皮を残しだらりと前に垂れたりと見入る。すぎ女は武夫の姿の美はしさに合掌もらい泣きし、又やがて与一郎はすぎ女に目礼静かに室を穢せしをわびたれど、取り詰めし土民の声に意も通せず。与一郎は立出で土民に向い「吾々は盜賊に非ず天朝の為に公儀に嘆願、はたさず、手向いは致さん、尋常に繩に掛け一同の身

の明りを立てん、早々縄打て」と言うに恐れて近づくものなし。

故に黒田大小を投げ棄つるに土民争い取り上げ石に斬付け刃を叩きこわし、安積の番太喜蔵恐る近付き縄打ち「安積の喜蔵召取つたり」と仰々しく言うに黒田顧みて呵々大笑。喜蔵をうながし美玉側に至りかゞみ「美玉氏確かに」と言うに美玉微妙に目を見開き「うむ黒田か」と言う黒田「はいわかりますか。兄も相果てました」と言えば、「うむそうか、黒田苦しい水をくれ」と言う。黒田は周囲に「誰か水をやつてもらいたい」と云うに、力蔵とすぎ女水を汲み米り美玉にふくませたり。美玉の息を引取つたは真夜中の十二時過ぎなりしと。(すぎ女談)時に中島三十九才。黒田三十才也。時は十月十四日午后四時半頃なりと。

生野拳兵解説

文久三年(一八六三年)十月十一日兵庫県朝来郡生野町で、平野二郎、美玉三平らが、沢主水正宣嘉(一八三五-一八七三)を絵師として反幕府の火の手を挙げた事件を生野義拳と呼んでいる。

総師 沢主水正宣嘉

総師御側役 田岡俊三郎 森源蔵

総監 平野二郎 南八郎

議衆 戸原卯橘 横田友次郎 旭健

軍監 川又庄一郎 小河吉三郎

録事 藤四郎

使番 高橋甲太郎

節制方 中島太郎兵衛 美玉三平 多田弥太郎

堀六郎

(節制所は丹波屋太郎左エ門向座敷に設け農兵の徴集、編制、武器、弾薬の用意、其の他の任務に当る)

周旋方 中条右京 太田六右エ門 太田悟一郎

農兵徴集方 黒田与市 長曾我部太七郎

兵糧方 小国謙蔵 小川愛之助 太田仁右衛門

以上が部署割だが、小国謙蔵など現役人は否応なしに協力させられたらしい。それから丹波屋で認められた軍規あり。一不選貴賤 専尽忠節 進退皆可随大將御下知事

清酒

山陽

盃

名聲 韓四海

山陽 壹取酒造

五〇六三



郷土会の皆さん

もう夏です!!

洋酒と
清涼飲料は29号線
角目の
ストア

福井で

電話一三三番



但し、鐘を聞時は、目前に只取首在候共、踏止るべし、

不止者は斬。

以下十四項目を並べ

右の条々於違乱輩は、可処嚴科者也

平野二郎

南八郎

美玉三平

多田彌太郎

その他「但馬国旧家並に有志の人々え」としての布告文、
村々への触書、馬具や駄荷馬及び鉄砲の徵発令など各村々
役人、庄屋、年寄宛に出している。

この挙兵の最後の決定は十一日深更丹波屋の会議で断行となり
即時行動開始、生野代官所の引渡しを強要して十二日未明
から代官所を本陣とした。十時頃から村々の百姓ら農兵と
唱えて竹鎗鉄砲を持って追々集合、兵糧米も牛馬に積んで
持込む有様で、昼過ぎに約二千人の雑兵参集したという。

相当に氣勢が揚つたと思うが結局一戦も交えずに潰れ去つたのである。

勿論幕府方は直ちに、各藩に指令して討伐に向わしめた。出石藩が十三日出発、十四日に姫路藩、其の他柏原、官津福知山、豊岡、龍野の諸藩が出兵することになったから大変である。しかし、一番近い出石勢も、南八郎ら自刃の後やつと山口村に着、十四日午後八時頃であつたという。

この義挙は、大和天誅組応援のために企画されたもので平野国臣が、三田尻に滞在中の三条以下七郷を訪ね、沢宣嘉を脱出させ、同時に河上彌一、戸原卯橋ら二十余人の同志と共に生野に向つた。これが十月二日、八日姫路着、このあたりで大和敗報を聞き一同落胆。京都より進藤俊三郎待りけて中止を勸説した。南八郎（河上彌一）戸原らの強行説、平野、本多、北垣らの持重説は、結論をえずして十一日に生野着、その夜丹波屋の大激論となり、遂に即時断行に踏切つたものである。当夜参集者三十四、五人というこの大部分は非戦論者であつたのか、主戦論に押し切られたしこりが、戦略の不備、不一致を来し生彩を欠くことになつた。

十三日南八郎は、山口村に出で出石藩を防ぐ陣地を妙見山に構築、同志十七人、地元民の援助で専念していたその祖、生野本陣では沢郷初めわれ先にと脱出騒ぎとなり、十四日になると山口村の人々は、手の裏を返したように南八

郎一行の敵と変つた。地元民としては止むを得ぬ仕儀であつた。その結果、南一行十三人は妙見山を降りたところを土民から鉄砲で攻撃をうけ、悲壮な自刃を遂げたのである。沢郷一行は、栃原、千町峠、安栗郡の上野、千種を横切つて作州に出て、林野から吉井川の始便で西大寺に脱出、沢郷のあとを追つた前木鋳次郎一行は、千町から横住の谷に出て、三方谷本街道を下り、山崎藩の番所をは入り、千種川を舟で赤穂に下つた。この一行に僅かに遅れて美玉三平一行は神子畑から黒原越えをして三方谷福中福知辺から前木一行と同じ道を落ちて行つた。ところが不運といふか生栖と神戸境辺から押寄せて来る農民らに悩まされ、木ノ谷に至つておのよ様な最後を遂げる仕儀になつた。

略 歴

美玉三平（一八二二—一八六三）

鹿兒島藩士、本名高橋祐次郎、諱は親輔、雷西、横軒、戴思、天恩等と号した。仮名、阿多隼人、秦安磨。文久元年一月有馬新七らと長崎居留外人襲撃を企てた。翌二年寺田屋事件に坐して藩邸に因われた。後江戸に亡命、三年二月但馬に入り、農兵組織運動に協力。十月生野拳兵に加り木ノ谷に死す。色白の丸顔で短気な方。淡泊竹を割つたよ

りな面白い人であつたと。行年四十二才。

中島 太郎兵衛（一八二五—一八六三）

文政八年養父郡高田村に生。名は重孝、幼名信次郎、先租は黒田氏、武士であつたが、高田村に住みつき代々庄屋を勤める家柄、当主は太郎兵衛を名乗ることになつていた。初め竹田町諏訪神社々司宮本池臣に学び、後伊勢の足代弘訓に国学教授をうくること三年あまり、家屋を傾けて武事に専心、文久三年正月には妻女を離縁して、農兵組織などに乗り出す一大決心をしている。義挙主謀者の一人で、美玉と共に木ノ谷で死去。年三十九才。

本多 素行（一八一八—一八六四）

名は小太郎、もと山本吉之允という膳所藩士、天保七年致仕、明暗寺に入り普化僧となる。素行と称し、法号静観、養父郡養父市場明暗寺出張所に滞留、十四、五年ばかりいて人望あり、思慮、胆気備わり辯舌爽やかで村方、代官所双方より信頼されていた。義挙後捕われて、六角の獄にて

店舗拡張のため 蔵ざらえ

高級家具を超特価
掘出しものが山積!!

6月17日より
7月5日まで

姫路と
同じ品なら
2割安い!

青柳の赤札市

250坪の家具センター
本町 TEL.121



平野らと翌年斬られた。

平野 国 臣 (一八二六—一八六四)

福岡藩主、文政十一年生、小金丸家へ贅養子となり、安政三年妻と一男二女を残して離別、平野姓に戻る。実名は種言、種徳、国臣、通称は、己之吉、乙吉、雄、雄助、源蔵、次郎、二郎、変名は、胎岳院雲外、宮崎司、田中作八、田中滑龍、藤井五郎兵衛、草香江水辺、家号を月廼舎、友月庵、独 軒、柏舎という。多年国事に奔走したことは有名で和歌や著書も御存知じのとおり。捕えられて京都六角獄で元治元年斬られた。年三十七才。

河 上 弥 市 (一八四三—一八六三)

山口藩士、別名彌一郎 名は正義、変名は南八郎。高杉晋作の奇兵隊総督となる。後上京して禁門守護中八月十八日の、政変で帰国、沢郷に従い生野拳兵に参加し、同志十二名と壮烈な自刃を遂げた。年二十一才

美国神社春季祭典

宍粟郡山崎町木ノ谷の美国神社春季祭典は、四月十四日同神社で挙行。当日山崎町長 大西山崎町議長、各部落総代、郷土会役員(安井、横井、志水)が出席、地元の方々多数参列。大谷官司祭事殿行のあと、餅投げなどありて賑つた。

美国神社は、通称美玉神社とも云い、勤王の志士美玉三平、中島太郎兵衛終焉の地にその靈を祀つたもので、境内に小笠原貞孚子爵の筆になる美玉中島両氏の墓を大書した碑がある。

宍粟郡の近世産業 (三)

宇野 正 碓

三(続) 宍粟鉄の生産と流通

(Ⅲ表) 天兒家鍔荷請払帳

安政5年 成田屋次郎兵衛

銘柄 受入月	高	上	上12	上8	12	銚	上	下	釘	針金	
春 川	1月	82	25	63		1			1	13	
	2	169	29	107					1	52	
	3	54	5	47						22	
	4	125	44	116	2	1				56	
	5	47	10	46						3	
小計	477	113	379	2	1					146	
嘴 崎 出	6					66				14	
	7	30		3		296				1	
	8					33					
小計	30		3			395				15	
秋 川	9	63	12	23						6	
	10	184	49	93					1	19	
	11	23	11	26			132			15	
	12	102	39	174				12	9	1	26
小計	372	111	316				12	9	2	66	
総計	849	224	698	2	1	395	132	12	9	4	227

(Ⅴ) 天兒屋鍔荷請払帳

安政7年 成田屋次郎兵衛

銘柄 受入月	上	高	上	上	12	針金	
春 川	1月	26	44	7		14	
	2	118	116	16		23	
	3	67	141	20	7	1	13
	閏3	46	161	25	2		21
	4	73	95	18			4
小計	330	557	86	9	1	75	
嘴 崎 出	4月末						
	5						
	6						
	7	4	4				222
秋 川	8		109	10		2	
	9	1	18	2			
	10	126	115	14	2		26
	11	35	36	4	2		36
	12	144	112	27	2		36
小計	306	390	57	2		100	
総計	640	951	143	11	1	222	175

(Ⅳ) 三室山鍔荷清払帳

安政5年 成田屋次郎兵衛

銘柄 受入月	大	中	12	上	上	上	上	上	上	上	
1~5月 (春川)	1	1		13	19	5	27	60	2	1	30
7~ (嘴崎出)			51								
9~12月 (秋川)							31	69			1
総計	1	1	51	13	19	5	58	129	2	1	31

Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ表の量目記入のない分は一束12貫とする。

(Ⅷ) 天兒家鋳荷請払帳

明治2年(成田屋)
加藤次郎兵衛

受入月	銘柄	※上	一高	天※上	※	一吉	一平
春 川	1月	53	26	50	24		
	2	119	5	192	15		
	3	4		24	9		
	4	58	6	101	16		
	5	25	4	55	12		
小計	259	41	422	76			
秋 川	9	125	6	181	51		
	10	2	3	50	7		
	11	107	12	310	36	1	
	12	79	10	277	21		10
小計	313	31	818	115	1	10	
総計	572	72	1240	191	1	10	

(Ⅵ) 赤西山鋳荷請払帳

安政7年
成田屋次郎兵衛

受入月	銘柄	鋳12匁	鋳8匁	針金	
春 川	1月	147束	133束	9丸	
	2	148	71	17	
	3	178	127	13	
	閏3	144	78	16	
	4	109	67	20	5月荷なし
小計	726	476	75		
嘴崎出(陸川)	6	27		48	
	7	141	83	16	
	8	99	76	7	
	小計	267	159	71	
秋 川	8	215	86	16	21日以降
	9	93	45	18	
	10	215	108	36	
	11	284	160	35	
	12	248	160	39	
小計	1055	559	144		
総計	2048束	1194束	290丸		

(Ⅸ) 三室山鋳荷請払帳

明治2年
加藤次郎兵衛

受入月	銘柄	鋳④	鋳10匁	改吐	上 12匁	合
1月		64	20			
2		150				
4~10				11	5	2
総計		214	20	11	5	2

(Ⅶ) 赤西山鋳荷請払帳

慶応2年

受入月	銘柄	8匁	12匁	天定 12匁	上 8匁	上 12匁	針金
春 川	1	107束	150	2	9		
	2	190	142				
	3	124	176				
川	4	92	177				21
	小計	513	645	2	9		21
秋 川	9	38	76				
	10	144	201				
	11	154	244				
川	12	18	29			4	4
	小計	354	550			4	4
総計	867	1195	2	9	4	4	

Ⅷ表 = 一束12貫とする。明治2年には外に「赤西山」「音水山」稼行中、各々同量程度と生産と考えられる。

慶応2年には「天兒家」も稼行中にて「赤西山」と同量程度と見うる。

以上資料に基いて生産量の推定を表示すると次表の通りとなる。即ち実粟郡年産5～6万貫

(X)

鉄山 年次	天見家山	三室山	駒前山	赤西山	計	備考(推定)
宝永五年頃				外に富士野都多、音水	10000駄	
享保四年			3100束		49600貫	} 坂木山稼行中 ×0.5
享保五年				2280束	36480貫	
天保十五年	27400貫外に針金255丸(高羅?)					×2.0 鍵掛山稼行中
安政四年	27864貫外に針金、釘277丸					×2.0 ※音水山稼行中
安政五年	27860貫外に針金釘229丸	3732貫		稼行中		×2.0
安政七年	23616貫外針金175丸			34128貫外針金290丸	57744貫	
慶応二年	稼行中			21420貫外針金21丸		×2.0
明治二年	25032貫	2984貫		稼行中		×3.0 音水山稼行中
明治五年		東河内銅 3000 小茅野鉄 64600	河原田 ・引原 鉄 9050		鋼3000 鉄 73650	

註 ① 「六ツ吹」の外に「四ツ吹」ともある。フィゴの大きさは前者4尺～4.5尺×4尺～4.5尺、後者4尺×3.4～3.7尺の天秤のフィゴのことらしく再考の必要あり。能力は「四ツ吹」より「六ツ吹」の方が五割方大きい。又六、四はフィゴの数か

②③④ 元文元年よりの逆算よりすれば年数不合、②の亥、③の子として享保四・五年とした。研究紀要一号報告と符合を欠く再考したい。

⑤ たたら研究紀要一号拙稿

⑥ 本論初めの引用文参照

品質
精選

夏バテを防ぐ

阪本の肉



中央通 TEL. 457

美玉事件届書

去月十四日申之刻下り伊豆守領分播州宍粟郡木之谷村年寄 善藏居宅江浪士二人駆込、一人致自害残り一人之者致介錯、其者も可致自害様子之処、同州三方谷筋御料所村々之者共右浪士追掛ケ参り一人捕縛、右之者共申聞候ニハ手負今一人有之筈之処、何レエ参候哉相尋候ニ付所を致穿鑿候処、往來端ニ小森有之候処忍居候ヲ追懸ケ参り候者之内、鉄砲ニテ打留候趣、領分木之谷村庄屋ヨリ届出候間早速家来之者出張為致取調候処江但州生野代官所カラモ追々村役人之者罷越右浪士引渡候様御同所御代官所ヨリ差図有之趣右村々庄屋共ヨリモ申出候ニ付任其意家来之者召連候人数差添差送り申候、右之趣大阪町奉行所江御届申上候旨在所役人共ヨリ申越候間此段御届申上候、以上

十一月三日

森伊豆守家来

荒木 作右衛門

(註)この届書は、森藩が公儀に届け出た公文書で、領主から見た?

木之谷事件の一端を知る資料の一つである。

妹尾家古文書類寄贈

宍粟郡山崎町山田町妹尾聰治氏は、新築の為旧家取毀の際書籍、古文書類を図書館及び郷土会に寄贈。同家は旧幕時代年寄役を代々勤めた家柄で、穀物問屋であつた。先々の妹尾新次郎氏は山崎町長に永らく在任、御存じの方もある筈。和書は、三十余点で百余冊あり、四書、五経揃二十一冊、百人一首一夕話九冊、頭書字彙十五冊など明治以前の刊本が大部分である。本会に寄贈をうけた文書は、手箱三箇に右証文志(主として借用銀証書)約百七十点で、冊子約十点、小形紙切れ等文化、文政以後のものである。外に八幡神社所蔵と同じ「絵町地詰帳」の大冊あり、やや痛んではいるが貴重な資料である。それに、福島正則の愛用したと伝えられる鞍とおぶみも寄贈されこれらの保存に万全を期したいと準備している。この時、同家からは、保字小判、二朱銀、元文銀、一分銀、一文銭など約百枚も発見された。妹尾家には、旧幕時代に、立志という俳人、正孝という歌

人あり、正孝の歌ノトも寄贈文書の中にあり、尚、三井寺内の円満院との金融関係書類が相当あり、今後の研究によつて興味ある事実が出るかも知れない。

宇治方面の見学旅行



五月二十四日案じて居た神姫のストがやつと妥結したので安心して旅行が出来た事となつた。百九十人の参加者が六時ピッタリに観光車三台分乗して出発した。姫路あたりよりはガイド嬢の馴れた説明を聞きつつ追々と旅行気分になり、明石神戸を過て尼崎インタチエンジへ着、それから昨年開通の高速道路を突走る。且々なる広い道を快適のドライブで眠るには勿体ない。フアーとなる気分では橙色の電灯がまばゆい墮道も三ヶ所通過して、南京都へ着いたのは十一時、それから伏見町を通り本年三月竣工した「伏見桃山城」に到着した。三百七十年の昔そのままの雄姿を再現した城は空中高く聳えて居る。一同はエレベーターで登閣した。頂上の展望は近く桃山の深緑を見下し、遠く京都も望まれて眺望満点であつた。各階には桃山文化の豪華品が陳列せられ、時代人形の行列まであつた。ここから宇治へ車は進む。「平等院鳳凰堂」を拝観する。阿字の池には水蓮が咲いて居る。堂の両翼鳳凰が水に映つた景観はすばらしい。内陣に入り説明を聞く。丈六阿弥陀仏金色二重の天蓋

と四壁には紫雲に乗り楽器を抱いた五十二体の木像がある。何れも藤原氏全盛時代の遺物で勿論国宝である。境内に頼政の扇の芝、鈎澱など見る所もない。川原で清い流れを見つつ昼飯をしたためてから車を対岸に廻して、「興聖寺」へ参拝した。寺は仏徳山と号し我国最初の曹洞霊場である。琴阪を上る両岸苔蒸した大岩も見事であり、その道を覆ふ滴る若楓に秋の紅葉が思はれる。境内は静かと清らかという一語に尽きる。かくて最後の目的地「万福寺」へ着、寺は黄壁山と号し隠元禅師の開基である。中年の一僧侶が壇上から特別解説をして下さる。起源、沿革、七堂伽藍の説明もユーモア入りで一同大満足であつた。建造物は大方唐朝作りで外の寺とは変つて居た。

以上予定のコースを終ろうとして帰路につく。南京都より又高速道路を尼崎へ一走り、車中俄雨の洗礼を受けたが旅行には何の故障もなく、夜景の神戸も一見して元来た道をひた走り山崎帰着は十時近かつた。(安井記)



結納調達

竹田屋

会員名簿 (16)

本町	石原 茂信	大歳 表	政市
"	村上 稀一	山田 南川	はるゑ
"	久保 政治	中鹿沢 東	和枝
旭町	三渡勝二郎	本鹿沢 二十軒	まき
庄能	井上 豊子	西鹿沢 前田	穂積
上寺	池田 たつゑ	神野 田中	うめの
"	池田 允	"	藤井奈津枝
須賀	内海 太郎		

雑記

●吉川英治氏未亡人文子女史は、令嬢を伴い評論家嘉治隆一氏、詩人富田碎花氏、のじぎく編集長宮崎修二郎氏らと姫路、竜野を経て三月二十五日山崎町を訪れ、故英治氏寄贈の山崎關齋木像及び關齋神社の奉獻の碑などを親しく眺めて、翌日美作地方の宮本武蔵遺跡を見て鳥取經由で帰京された。

●本会本年春季見学旅行は別記のとおり宇治、伏見方面に五月二十四日挙行。会員多数の御支援を感謝します。

●山崎美術協会が二月十五日発足。写真、絵画、書道、工芸の四部門に別れ、二百名近い会員あり、毎年秋に美術展開催する。事務所は、町教委会、会長小林善太郎氏。

後記

▲山崎町に因縁ある美玉、中嶋両氏の死後百年に当りますので、其の記念号のつもりで本号を編集しました。

▲巻頭の筆者大谷氏は、閨賀稻荷社の宮司。先代が苦心の孔版「木の谷非史」を刊行されたが、今は一寸見当らなくなつた。木の谷で最後を遂げた美玉、中嶋両氏の事実を改めて紹介せられた次第です。

▲生野拳兵の事実も、年遠くなつていたので概要の説明を掲載しましたが、本当は、この事件のおこつた時代と原因に言及したかつたのですが、紙面の都合で最少限度に止めました。

▲妹尾家より寄贈の文書類は、五月三日受領しましたが、中々一通り目を通すだけでも大変なので、部類別にして目録作成中で、その上御家流の難文字を讀了することは、相当の日時がかかつたことと思ひます。

夏です!!

扇風機 冷蔵庫

は



ごこう お選び下さい。

本町 電 331